

# 琉球大学学術リポジトリ

## 平成22年度 トータル支援活動について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2011-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦崎, 武, Urasaki, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20167">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20167</a>

## 平成22年度 トータル支援活動について

浦 崎 武\*

### Fiscal Year 2010 The Total Support Project

Takeshi URASAKI

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターでは2006年10月より実践トータル支援活動がスタートし、本年度で5年目の取り組みとなった。この活動は地域の子どもたちへの支援教育や保護者の子育て支援をすることにより地域社会に貢献すること、子ども、学校、教育機関、関連機関、保護者との連携により学生や現職教員の実践力の向上を目的としている。

昨年度から「発達支援教育実践センター」として名称を変更し、センターが新しい場所に移設され、さらに「特別研究員制度」を設けて、特別研究員がセンター活動の協力支援員として位置づけられた。昨年度、崎濱朋子（沖縄市立中の町小学校教諭）、瀬底正栄（東村立東小学校教諭）、武田喜乃恵（那覇市教育委員会教育相談員）が特別研究員として位置づけられ、本年度は金城明美（名護市立久辺小学校）と大城麻紀子（那覇市立石嶺小学校）が新たに加わった。特別研究員の力添えによりトータル支援活動が実りあるものとなった。

トータル支援活動として「トータル支援教室（集団適応教室）」を月二回、教員、学生および発達支援教育に関する専門家を交えて「実践事例研究会」を月1回、また教員や保護者を対象にした「相談支援」、子どもたちに継続的なサポートが必要であれば定期的に支援を行う「個別支援」等を行ってきた。支援を必要とする子どもたちへの支援教育実践活動を通して子どもたちの理解や教育者や支援者の教育のあり方について考えてきた。

当センターにおいて「トータル支援教室」は中心的な事業であり、今まで4年半で75の支援のための企画案を実践してきた。地域の子どもたちが支援を受け、保護者の子育てを応援し、現職教員、保育士、支援員、関連領域の専門家のリカレント教育の

機会を提供し、大学院生や学生に実践教育の場を与え、行政などと協力して地域に貢献し、実践研究を深める支援を行っていることで、「トータル支援教室」と呼んでいる。また、子どもたちとの関わりを通して子どもの特性を多角的に捉え、支援教育の多様性を追求し総合的包括的に支援していく上でも「トータル支援教室」と呼んでいる。

この教室は個別支援、集団支援、学校および教育機関との連携支援、子育て支援という4つの柱から成り立っている。活動への参加者は、実践力養成の源となる発達支援、教育実践を行う。その活動の終了後、子どもたちとの関わりによるエピソードを具体的にとりあげ、反省会を行い、そして、その後、参加メンバーみんなで行う交流ミーティングを通して子どもたちの理解および支援のあり方を深めている。

センターの支援活動は5年目に入り、大学を拠点とした地域貢献および教育、研究活動を中心とする第1次段階から、「発達支援プログラムの構築」を目指す第2次段階「トータル支援教室」、「実践事例研究会」、「相談支援」等の取り組みが定着し、本年度は第3次計画として大学から離れた離島・へき地へ地域支援を目的に位置づけ「出前支援による実践力養成システムの構築」を目指してきた。大学を拠点として「実践事例研究会」は年間12回、「相談支援」は年間93事例、468セッションを行い、八重山地区の出前支援では「トータル支援教室」、「実践事例研究会」、「相談支援」に加えて、離島・へき地の地域と交流し理解を深め支援に生かすための「情報交換会」を行った。この八重山支援は昨年度から、教育学部における「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム」の一貫として「発達支援教育における実践力養成システムの構築と離島・へき地への展開」

\* Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

と題して、八重山教育事務所の協力を得てプロジェクトに位置付けている。本年度は9月に開催したが、10月の東村教育委員会の協力による東村立東小学校においての出前支援は台風の影響により中止となった。本年度は積極的に離島・へき地に出向き、地域の土壤に触れながら子どもたちや発達支援教育に携わる先生や支援者と関わり、ともに学び合うことができた。また、「トータル支援教室の支援」を学校現場に還元し、特別支援員による「授業実践」として取り組みが行われた。

大学を拠点とする定例のトータル支援活動においては昨年度に引き続き、「読谷村教育委員会の特別支援教育支援員の実践力養成支援」、本年度から新たに「那覇市教育委員会」も支援員実践力研修と位置づけて参加した。特別支援教育支援員をトータル支援教室で受け入れ、発達支援教育実践についてともに学ぶことができた。

そこで本紀要において本年度事業の成果を実践研究論文としてまとめた。センターおよび八重山で実施した支援企画「遊びを媒介とした他者との関係性と共有に基づく集団支援－支援企画‘みんなのまちをつくって遊ぼう’－」（浦崎、武田、崎濱、瀬底、大城、宮脇）、授業実践「自立活動」として教育課程に位置づけ、かつ通常学級でも実践した連携支援として「遠隔地間の特別支援学級における交流学习の取り組み－遊びを通したコミュニケーション意欲の向上をはかる指導の工夫－」（瀬底、浦崎）、大学を拠点とする当センターにおける個別支援として知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援－指示に反応し怒りを表出する小3男児とのかかわり－（金城、浦崎）、

最後に事業報告としてセンターの平成22年度（2010）事業について報告する。

## トータル支援教室

### 集団支援

遊びを媒介とした他者との関係性と共有に基づく集団支援－支援企画‘みんなのまちをつくって遊ぼう’－（浦崎、武田、崎濱、瀬底、大城、宮脇）

### 連携支援

遠隔地間の特別支援学級における交流学习の取り組み－遊びを通したコミュニケーション意欲の向上をはかる指導の工夫－（瀬底、浦崎）

### 個別支援

知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援－指示に反応し怒りを表出する小3男児とのかかわり－（金城、浦崎）